

平成 27 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業  
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	筑波大学
研究開始年度	平成26年度

## I 概要

### 1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
国立	特別支援学校	知的障害	つくばだいがくふぞくおおつかとくべつしえんがっこう 筑波大学附属大塚特別支援学校

### 2 研究テーマ

知的障害特別支援学校における教育課程の編成とその運用プロセスについて、モデルの指導計画集等を用いて実践的に検証する。

### 3 研究の概要

13年間にわたる知的障害特別支援学校におけるカリキュラムの開発とそれを運用した授業づくり研究の成果を踏まえ、「個別教育計画」、「学習内容表」、大塚モデル「指導計画集」という3つのツールを活用した授業づくりの実践的研究を行い、その有効性と課題を明らかにすることを研究目的とした。具体的には上記した3つのツールを教育課程の中心に位置づけ、授業づくりに活用するためのより有効的なプロセスを検証した。単元デザインの手順においては、最初に「個別教育計画」を用いる場合と、大塚モデル「指導計画集」を用いる二つのプロセスが確認されている。今年度各部で行った研究授業は、「集団活動の楽しさがわかる」「共同活動を深める」「自尊感情を育む」「自らの気づきと育ちにむすびつく」など、「学習内容表(人間関係領域)」が軸として用いられ、各指導形態のねらいを踏まえながら指導計画を立案・授業が展開された。指導計画の評価と改善をサイクル化する中で、個と集団の教育的ニーズに応じた柔軟な単元計画と授業づくりを行うことができた。例えば他者との情動共有や共同活動、仲間意識、役割といった、各部段階で重視される学習内容に基づいて、学習活動の展開や学習集団(グループ)が改善されたり、他の学習計画との内容的なつながりが検討されたりした。また指導計画に基づいて行われる研究授業において、授業評価シート等の共通ツールを用いることで、全校で授業改善のための授業評価ができた。

### 4 研究の成果

「See(評価)-Plan(計画)-Do(実践)/Improve(改善)」のプロセスモデル(本校研究紀要第48集,2004)に基づいた授業づくり研究の成果として、3つのツールの活用により、実践の方針がぶれずに、再現性の高い授業づくりが実現できることがあげられている。特に大塚モデル「指導計画集」の活用により、幼稚部から高等部に至る授業の「ねらい」の系統性・

発展性がより共有され、単元目標と個別の目標を設定することができた。例えば他者との情動共有や共同活動、仲間意識、役割といった、各部段階で重視される学習内容に基づいて、学習活動の展開や学習集団（グループ）が改善されたり、他の学習計画との内容的なつながりが検討されたりした。また指導計画に基づいて行われる研究授業において、授業評価シート等の共通ツールを用いることで、全校で授業改善のための授業評価ができた。評価シートの記載内容を集計・分析した結果、集団目標の達成度に関する記述や、教材・教具の工夫やアイデアに関する記述が多く見られた。また事後アンケートでは、「評価シートに関わる観点について、部研究でも話し合いをもつことができた。」等の記述が見られ、評価シートの記述内容がその後の授業改善にもつながっていることが推察された。

## 5 課題と今後の方策

課題として、指導計画を検討する時間的な制約があげられる。各部の研究課題にも取り組まなければならない中で、指導計画の評価を研究の時間で行うことに十分な時間をもてなかったという意見も出されている。評価と改善の方法を整えつつ、今後は年間計画の中に位置づけ、より計画的に行う必要がある。また、より系統的・発展的な授業を模索するにあたり、指導計画の評価や改善の履歴を蓄積し、次年度の基礎資料として残していくことも重要である。そのためのアイデアの一つとしてICTの活用が考えられる。例えば「学習内容表」と「指導計画」をデータベース化し、計画段階で各授業に取り入れる学習内容や、授業実施後の評価結果を各書式に反映させることで、教員がその都度書類を作成する手間が省け、業務コストの軽減につながると考える。また授業評価シートについては、授業改善との関連性が示される一方で、「ちょっと（項目が）細かすぎてついていくのが大変。何について評価するのか絞り込みながらできるとよい。（事後アンケートの記述より）」などの意見も挙げられている。子供の変容（行動）を根拠にした上での手続きの妥当性を検討し、シートの形式や内容を含めて、授業研究会の方法についてさらに検討を重ねる必要がある。